

脳卒中患者における日常生活自立度と嚥下機能との関わり

稲次整形外科病院

稲次美樹子（会員番号 121276）、稲次正敬（会員番号 121082）、稲次圭（会員番号 121352）

徳島大学病院理学療法部

高田信二郎（会員番号 411274）

【目的】本研究は、脳卒中患者における日常生活自立度と嚥下機能との関わりについて明らかにするものである。

【方法】対象は虚血性脳血管障害患者 49 例であり、年齢は 55～93 歳（平均年齢 73.4±8.2 歳）、男性 28 例、女性 21 例であった。これら対象は、介護保険における障害老人の日常生活自立度を用いて、準寝たきりのランク A 群（A1 は 3 例、A2 は 17 例）、寝たきりのランク B 群（B1 は 12 例、B2 は 12 例）およびランク C 群（C1 は 3 例、C2 は 1 例）の 3 群に分けた。各群の平均年齢は、ランク A 群は 73.7±7.2 歳、ランク B 群は 74.0±8.8 歳、ランク C 群は 67.5±8.7 歳であった。嚥下機能は、反復唾液嚥下テスト（以下、RSST とする）で評価した。

【結果】RSST の結果は、ランク A 群は 1.9±1.2 回、ランク B 群は 1.3±1.2 回、ランク C 群は 0.8±1.0 回であった。ANOVA による 3 群間の比較では、有意な差はみられなかったが、日常生活自立度が低下すると、嚥下機能が低下する傾向が示された。

【考察と結論】研究結果から、脳卒中患者では、日常生活自立度が低下するとともに、嚥下機能が低下することが示唆された。嚥下機能を詳細に検査できない介護施設において、脳卒中患者における日常生活自立度は、嚥下機能の予測因子の一つになり得ると考えた。